

宇治拾遺物誌

五

共八

予後初稿下本一目錄

一 猿師ほとをと村事

一 千手院僧正仙人よあふ

一 跡のを則聖洲

一 資と和尚教事

一 越おへお婆の女親者たどまぬふ

一 くうすけのほとゆいやくの事

一 恒正の事おかきくやうの事

一 おり見て飛とをくさおく

一 大安ふお苗かよおすく男あつる

一 博お聲入の事



一伴大洲と焼應天門の

一放尊樂の暹もき季りあふ

一堀川院の暹も苗あつあきあ

一浄慈のやあつあつのはり強盗り

一ひるまのうらまのゆあ

一吾妻人生覺をとくむら

一あまの事

一愛人といふ事

一小槻あま事

一あまの事

一あまの事



宇治拾遺物語下中一

若あつあつの山はひさしくむとあひひ

やうはつて坊をとりあつあつあつあつ

はひひとあつあつあつあつあつあつ

とあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつ

かたあつこころありて拜をいしとてしこころありあ  
てひいころのほろよきたしつのおとよまの路よも  
りつらふもちやまの道とほほとたつこころいせ  
らちやとくこころをいみとそみまりて候とりふ  
は猶神教もこころをうごころやあつこころをのうら  
ろりつらひのせすておえ井あり九月廿四日と  
なほまじきもあつこころ今やくと約は数本のゆき  
と思ふ程よ東の山は麓より月のつらつらよみ  
て雲の嵩もすさまりまふこた坊のうらきり入  
るもつらつとあつこころなりぬれを普賢井邊よお  
こむりくたつておのまのころらあつこころい

あつこころのつらつとてつらつとあつこころい  
ひとつらつとつらつとあつこころいひとつらつと  
しつらつとつらつとつらつとあつこころい  
たりらつらつとつらつとつらつとあつこころい  
を我がなほしや澄乃むきつらつとあつこころい  
るつらつとつらつとつらつとあつこころい  
てはつらつとつらつとつらつとあつこころい  
ひつらつとつらつとつらつとあつこころい  
つらつとつらつとつらつとつらつとあつこころい  
とつらつとつらつとつらつとつらつとあつこころい  
けつらつとつらつとつらつとつらつとあつこころい

行書より一は是をいふ一はつらとつひては  
まとい事限る一男一りつをひ一のめふ一を  
みえ流るつらつはとつらま若の目ふみしめ六試  
やうびとやと射はつやまの佛らつもふらつ  
ら流らつ一それまあも一は物るもつひつら教  
て血をとめて行てみり建つ一町計行てるのたよ  
たなる裡ひのりつらとつらつやとつらつてあ  
てあきつらつひ一つらつれと無なるれまのやう  
けつらつ建つらつや獵師なれとつためらつらつら  
りつらつあぬまを射害をとつらつらつらつ也  
むつらつ山れつらつ院一住持つらつ静觀僧とつらつら

あつらつてつらつ勝つらつ屋とつらつらつらつらつ  
てつらつつらつらつらつらつらつらつらつらつ  
たり陽勝仙人とつらつ仙人をて死てあつらつらつ  
をす死つらつがひつらつふのつらつらつらつらつ  
桐のがて本れつらつ人よるつらつ僧とつらつやつらつ思ひて  
とつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつ  
せう仙人とつらつひなりををす死つらつつらつらつ  
及のあつらつ兼つてあつらつ信なりとつらつらつらつ  
てつらつやつらつらつらつらつらつらつらつらつ  
初流つて今もあつらつらつらつらつらつらつらつ  
されてつらつらつらつらつらつらつらつらつらつ





へりしれはも又ちがしうつて出まぬぞとちりて  
 うふらさぬらううつていもつてたりくこれい  
 せ七八人まておまごまらふらとくはよみもの  
 つくするほとと物とめてひもつる別思ふやうよ  
 ひのちりてつりてあつてあつてあつてあつてあ  
 つかしのまじつひゆもあつてあつてあつてあつてあ  
 くらとちとちとちとちとちとちとちとちとちとち  
 まつせにちもつて行やこようりうらうらうらうら  
 ちこきてくく若りりきこつてあつてあつてあつてあ  
 こころ物とちりてあつてあつてあつてあつてあつて  
 まつりあつてもよあつてあつてあつてあつてあつて

ちとちとちとちとちとちとちとちとちとちとち  
 つく物とちりてあつてあつてあつてあつてあつて  
 まつりあつてもよあつてあつてあつてあつてあつて  
 ちこきてくく若りりきこつてあつてあつてあつてあ  
 こころ物とちりてあつてあつてあつてあつてあつて  
 まつりあつてもよあつてあつてあつてあつてあつて  
 ちこきてくく若りりきこつてあつてあつてあつてあ  
 こころ物とちりてあつてあつてあつてあつてあつて  
 まつりあつてもよあつてあつてあつてあつてあつて



目のまゝに初てむらりぬくくはし金馬より  
つともとむらりくからぬ目よおくくはるひて  
あまふらりおちりてくちを給うとひなれさ  
らうくもこころに扱ひぬいさむらり事  
あれをけしをあれ。あつてらしむらり  
候しんづりるうもむらりよくむらり物とおか  
くうそむられさうりくくあひくありのまうま  
らうらうむらりくくはしあめの國はくくは  
る。ゆりくむらりの幸よるて候しんづり  
く候しあひてはうむらりて給しむらりの  
こころ共にあつてはうむらりてきむらり

初ははしむらりて給しひかりの  
こころむらりてはしむらりて給しひかりの  
かりはむらりのあつてはしむらりて給しひかりの  
のむらりひひのあつてはしむらりて給しひかりの  
こころむらりてはしむらりて給しひかりの  
らうらうむらりてはしむらりて給しひかりの  
はしむらりてはしむらりて給しひかりの  
あれをむらりもむらりてはしむらりて給しひかりの  
七。水をあもむらりてはしむらりて給しひかりの  
みほちむらりてはしむらりて給しひかりの  
の死山は入ぬちる河はなりぬくちるは初て



まくの酒うしひぬ事んこるひぬもさるぬ  
さてしと事一のくされ物とさふらと也一の  
なうひぬりきれもろれ物とアんとてさしる  
られて物のかこぬぬ押さる眼も一太固よまう  
てゆやこのもさしる事とをうしひとて  
三れりぬ子よるしてゆらせぬを葉書と三足も  
つらなう鯉もるして巻盤のう人よやとらせらる  
かとと一なると物門のめよとさしるしめとくろた  
乃のよもつてなうとせゆたりぬ几丁れう人よ  
つと葉後につりさるわと一海はるも

昔のちこしよ室ら和もこの入ひとさるりみかく

いとうとくわうとされぬ門のれ重乃をくくを親よ  
つとこらんとて繪師三人とほつての一人一人  
してはまたつゆりゆとありとて三人して南よ  
うつすへまうと物物くうとてはらやさをゆよ  
三人のちしひしきのこくありてくせと一と  
あてまうていとうと一とをたさしとひては  
服の巻束して出ちひのつと三人は繪師そのく  
くもま箱をひろりく三人もひて事とくこん  
ととまよひとさしらく我ましとれ親つりるれ  
をこていさうつとしとつりひ書を絵師をたか  
くめくすしてひとの成親とさるたゆひつ

めおてひんじれ皮とさーまりてのしとぬふく  
のちちおより金まけ井乃うかとうさーせんら  
んれゑーん十一の親善とみる一へ入繪師もま  
親善とれつこまゆりつものくみくまうそ  
つしまりておる事りたるけまて西門おとろき路  
てるらの使とぬいさせのよよつらつらうよ  
一とろ勢のひぬさうさーらういへんそそむさ  
さるさわりとさーめくさる

越おの國はけつらつらあーさうりらんありや  
こさつこさつさつらつらつらつらつらつらつら  
らりやひんじれ皮とさーまりてのしとぬふく

ひまめとそ又か免回よつらくさけるこれめと  
らうあつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
あつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
と回又人まてやういさひ建とれたまうさうりけ  
まてとぬくのちちゆさうをさるさるわい家の  
さうらよ雲とまてくこのかたすけらんちて親善  
とすんまりりつ伊類しむらりなとてつら  
しくもるぬ指よ父うさうさうりつれたふあひるけ  
くおけつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
あつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
まてつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

びもやうふしとかつてくまきこちしむわの  
物乃すまゝの程きけくも多々思ふ人あり  
のまじやも思ふ程きけくは多々思ふ人の  
とりもなかりたり物くまきこちしむわの  
てまじやも思ふ程きけくは多々思ふ人の  
つまじやも思ふ程きけくは多々思ふ人の  
すけふへと親きまじやも思ふ程きけくは  
まじやも思ふ程きけくは多々思ふ人の  
来てつみかうやと親きまじやも思ふ程  
くまじやも思ふ程きけくは多々思ふ人の  
れつりしよまきこちしむわの程きけくは

みくあちぬひ佛のたまひのくまきこちしむわ  
水うらあちぬひ佛のたまひのくまきこちしむわ  
てられ人を物とてうらあちぬひ佛のたまひ  
女まじやも思ふ程きけくは多々思ふ人の  
あつへつてまきこちしむわの程きけくは  
まじやも思ふ程きけくは多々思ふ人の  
まじやも思ふ程きけくは多々思ふ人の  
て馬乃あちぬひ佛のたまひのくまきこちしむわ  
のまじやも思ふ程きけくは多々思ふ人の  
まじやも思ふ程きけくは多々思ふ人の  
まじやも思ふ程きけくは多々思ふ人の  
まじやも思ふ程きけくは多々思ふ人の









思ひのあはれ人のこころのしるしをひらいて  
 かくかくしくく、観言の導ひのせめあはりなり  
 し、くさくさなまもて命なる程なり、則ちこころ  
 だしてきたりなり、心ととも、あがくを馬の  
 ちまいてくらくらく、あつてまじい、くらく、くらく、くらく、  
 まい、まがぐ、まがぐ、まがぐ、まがぐ、まがぐ、まがぐ、  
 酒のまがぐ、まがぐ、まがぐ、まがぐ、まがぐ、まがぐ、  
 り、美、ぬ、あ、は、し、く、く、く、く、く、く、く、く、く、  
 て、ま、あ、は、し、く、く、く、く、く、く、く、く、く、  
 の、く、あ、は、し、く、く、く、く、く、く、く、く、く、  
 し、り、あ、は、し、く、く、く、く、く、く、く、く、く、

う、な、あ、は、し、く、く、く、く、く、く、く、く、く、  
 う、そ、あ、は、し、く、く、く、く、く、く、く、く、く、  
 う、く、あ、は、し、く、く、く、く、く、く、く、く、く、  
 の、あ、は、し、く、く、く、く、く、く、く、く、く、  
 き、い、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、  
 あ、は、し、く、く、く、く、く、く、く、く、く、  
 あ、の、物、と、ま、あ、は、し、く、く、く、く、く、く、  
 く、く、あ、は、し、く、く、く、く、く、く、く、く、  
 ま、れ、と、あ、は、し、く、く、く、く、く、く、く、く、  
 ま、あ、は、し、く、く、く、く、く、く、く、く、く、  
 今、あ、は、し、く、く、く、く、く、く、く、く、く、

たのりくつしをきてしぬこれ人こつゆさり  
はとめて入くひねりてこころを死たらしむるは  
くちしちしきまりしをきぬ親を念にやう程し  
その口をきぬ又の目おるりてこれうぶりのこと  
なふかぬむしをさしきんしとあらうと  
さうれつのもをきまへんつるもむしうた  
こしねとこがたのしつるも一りくまれ  
えおたのりは男のこころ入きておちつるさ  
むしう事なごひうりつるもむしうて  
つるまふりなごひうりつるもむしう  
思ふともぬりしとあつたしつるもむしう

さきつとをたのきてこころむしうはむしう  
てありたれねきんころりつるもむしう  
しうあつたつらごひつるもむしう  
まこと思ふことつるすくま物るしつるも  
のむしうつるすくま物るしつるも  
いさきつるすくま物るしつるも  
のむしうつるすくま物るしつるも  
ろくつるすくま物るしつるも  
つるすくま物るしつるも  
つるすくま物るしつるも  
つるすくま物るしつるも  
つるすくま物るしつるも







邦一ぬまよもとらぎんこらひひめしきもひいしく  
乃湯そひひつみ家尸志多みせいらこしよをあら  
すわ物やむ建らうよそいんるよけきいぬく  
まもしとの物まろき中る物といひてこらをね  
もんよ物をもろまたりなるこくてひくりしてた  
てまうりて仏の御眼をく入まひてのりもてうを  
らせやひひたれをいうよおらうこ思まをしよこ小女  
子らも凡二人ありひるをもし多みふは佛師  
かして凡のきんるふもこらてこしてしよこや  
川我も又まのこらてあんすくしうまてた力ひき  
まきこおまたりぬめ妻してらる佛師うむうませ

てまよいんるまたり佛師仏乃御眼入もてく男の信海  
まよいんるまものうく食て封けきて置らるるの  
とまこて置るりてめてうれおちりのよまけり  
まんよれおやうれこもふけうまんとまこくお  
のひらの程は法師こそくやして入るまらお  
め残いのうこして人の妻まこらのちりやうくを  
うまこしひひてたれとぬ多て佛師をまらして  
迄のくまらる佛師うらうらまうれぬと思くた  
ら迄は遊りて残といつきてまらまつくくは  
をいんるしてりやうまなまやうまらうつ  
らまやみらちわらんとまはく物を佛師まら

まへの事やうまひをけつをれのりよりしきうしてわき  
とて解つつけしゆもなれを佛師述のえていふつ  
またらて思ふもうしあく及どうらまうまはるか  
まぬらぬつしきうしてわつや解のよやう肢の互  
かどくしきつふしやも思もあみしあしく又歌わ  
らんとまうりる千善ハ物命しきまきりのるし  
とまぐおのくまふとらひあうくくれよなり  
まうりるのまうりるまうりる人ほひひをつ  
ひいせめし連を佛師とくしてわたりくして  
くすまけりしとま仏造つまうりたうひうく供養  
しきんてなうしひいし連をあのしん供養しう

人いひいあめうりめいむもまうりるようまひ日取て  
佛供養しきんてなうしひいし連をあのしん供養しう  
も抱ふひとらして佛師れあ入よあうりらんせきく  
してま目おひりて佛師らひんてなうりるまうりて  
入よはは佛師らひんてなうりておのくまうりて  
はらふまうりるしきうしてわつや解のよやう肢の互  
まぬらぬつしきうしてわつや解のよやう肢の互  
師をあひうあわしとらまうりるまうりるまうりる  
はらふまうりるしきうしてわつや解のよやう肢の互  
まぬらぬつしきうしてわつや解のよやう肢の互  
まぬらぬつしきうしてわつや解のよやう肢の互  
まぬらぬつしきうしてわつや解のよやう肢の互  
まぬらぬつしきうしてわつや解のよやう肢の互  
まぬらぬつしきうしてわつや解のよやう肢の互







大まふのりしり廻せりてきつゝせゆりありあつ  
ひのまうとそりくもあしぬ登り二まをりも  
る既難まゆことばまうよゆんあてしすむんく  
りてさうり誨師のまむいとしてに及んか、回ま入  
あり誨師はさほしひかうんれく一より僧とまん  
ゆりりりありたるくして抱くひ酒のまむいすく  
程この誨師はまむいせう思へする僧のりゆむ  
うしあまの誨師とやうけ活きともうれ佛とくむ  
うせしすううやううしうけは下んく蘇なれ佛を  
くやう一まううのあしん佛のあまうれう一ありと  
ありうけあて後難まゆとせしむとりの包やつひまをこ  
受てううことかりとてまき登えや供といゆもい  
佛くやう一まうんとするそのことなるかしたまきた  
うく六まきくみくよ者赤嶺に十道五十計なるいり  
まむいのいぬまをまていんくまにああしんくあられ  
とらへん誨師よまうてのいんくようひまをさあかう  
には何佛とやう一まうんまううといひしりり  
てうのちりまうんまむいんくともむんふまむいん  
まむいのいんくいんめくまう一なまうんくまむい  
まうのいんくまうまうまうのいんくまむいんくま  
まき登え凡くくやう一まううのいんくまむいん  
つゝのいんく佛とまうのいんくまううらあそともむいん

大まふのりしり廻せりてきつゝせゆりありあつ  
ひのまうとそりくもあしぬ登り二まをりも  
る既難まゆことばまうよゆんあてしすむんく  
りてさうり誨師のまむいとしてに及んか、回ま入  
あり誨師はさほしひかうんれく一より僧とまん  
ゆりりりありたるくして抱くひ酒のまむいすく  
程この誨師はまむいせう思へする僧のりゆむ  
うしあまの誨師とやうけ活きともうれ佛とくむ  
うせしすううやううしうけは下んく蘇なれ佛を  
くやう一まううのあしん佛のあまうれう一ありと  
ありうけあて後難まゆとせしむとりの包やつひまをこ  
受てううことかりとてまき登えや供といゆもい  
佛くやう一まうんとするそのことなるかしたまきた  
うく六まきくみくよ者赤嶺に十道五十計なるいり  
まむいのいぬまをまていんくまにああしんくあられ  
とらへん誨師よまうてのいんくようひまをさあかう  
には何佛とやう一まうんまううといひしりり  
てうのちりまうんまむいんくともむんふまむいん  
まむいのいんくいんめくまう一なまうんくまむい  
まうのいんくまうまうまうのいんくまむいんくま  
まき登え凡くくやう一まううのいんくまむいん  
つゝのいんく佛とまうのいんくまううらあそともむいん







かゝるやうな一かきいづくのび目鼻よりなり  
しむゆりりくくまゐりたまはたしうねよ又まゝ  
うもふはらひかたきてうつらひと巻よす入て  
かゝるのてまたりおとく物とらまをせまらるや  
思ひすけりいましくてまもふと思ふ指よ後あり  
ぬれらるまそみまらぬ房くひ物とりてまらるま  
うらうのこもをぬくふとせめてぬくちうもの地  
そくふよようばららぬれかしくやみぬらあり  
とせしくくむくむくむくしてむくむくの思ひすも  
りもぬれむらうちうきりきりひて物をくん  
すしそくくむらうのくちをむらようくくくゆかき  
ぬすけり

ぬすけり

きしとらりの子れま一わつきの目鼻くかきり  
うらうのこもをぬくふとせめてぬくちうもの思  
ひすもをぬれむらうちうきりきりひて物をくん  
すしそくくむらうのくちをむらようくくくゆかき  
ぬすけり



うて人ごまれに目鼻うつくはよらるる人んか  
やうかむむいぢるぶてあや余にこそPをうらとの  
れくろのちらつて申中一りりてきくおのまを  
めいらさむこのあゆ死ぶうがと一へひみぢをうて  
ちうくせうくぢうろくま物はまやうかへおめり  
けくぬよあひけくちもあなりとくいらんれと  
ちうせうくぢうしと思とけりまひはやあをりん  
室をまらんこひひてあてしつめいさくしん  
一めてそあもゆるあしうくはつたてあちよふ死  
教を造りてすたせえれらうくくてもあう  
今さ著水れるも心門の清阿一應天門やあわん

のじきううかなんわりりれと件き男うら  
大羽えあれ王信のち長れ志まひあむとあやてあ  
一うやなれとのおしとけさんとあむあ  
けくよ忠仁公世の政をあむくちやとあ三糸のふ  
た長よあひりて白くけりあむるあひあては  
めとさうくぢうろくあむあ馬帽ひひあむあ接し  
まありのすこばくことやんれ後あよあゆんた  
けらあむあむあむあむあむあむあむあむあ  
まむあむあむあむあむあむあむあむあむあ  
こむあむあむあむあむあむあむあむあむあむあ









これと今を放す樂の入樂との選に違ふべし  
人習はく人たるにたり白河院聖初幸のとしてとらひ  
けり予山階のけ三曲の信坊よりまづのうのいよ  
ひやひかありてある人ありしものつやうとく  
猶りより樂のこもく入まじり入りきととまじり  
是季やこりふ放聲樂なりひよこやひひんがあら  
かりこころよすおもしろあやうの事してけの樂を  
ほしへたる

これも今も若塔川院の山阿奈良の僧とをとり  
て大いしうやの由讀證せたるこれりよの選に  
中よあうられけりまよ山曲とありけり

やうくは調子をうくべからむひりくよの選調  
子よふおきりうのこまけりまよ山曲とありけり  
てあの僧とりの選ひよまうきとを  
流物よよのてのちりて美子よの苗やうくとく  
よをたうしはひのまふこのことまじりあうり  
とやそれされもようとして流物よひてありせられ  
ひらよ美哉樂とよものひよす吹とけり建や所感と  
てやうとてうれ苗をぬひてたり件の苗ゆりてり  
やうてよ苗やけりりよふありとら  
これと今も若塔天曆のしうりひ浄流のやううの坊  
にまうとらうれお入三ふれありあうの歌よあを

ゆるゆるとぬまの狭みさきさきとすのくちらさきみ  
てあつたすうとちりあつて敷別をふれやうく  
あまんとすくと死あつて。浄養をさす。啓白して  
こむくもたうきうもまへしとヤたりも何よ盛人  
とこつとつとまて遊ゆりうとら

今や若りるまの守まを替夫の子よあつてふとそ  
み柔じりよあつてとめをこれあつたあきむひ  
とつよもぬく父なりそのまこゆふたあ守まを  
ありのとこけりあへくちりたうと道よて死  
たつとのあつたあも何由お母とつひ一人のあ  
つとつちりけりそのつとらあ母つとせむにああ

まういらあつ牛つりたりま牛とんたつとて車つり  
りくもくを遣りうよひつめれ揚りて牛つひり  
く遣つと輪を揚りたりたうとつりりうよ引車て  
車の揚りたりとつとつらけるを車たつたつとひめ  
て牛つあきひろあつてたつとつたつひまひま  
て車つとつらてとつとつらうとつとつれ  
あつとつとつらてそつとつらうとつら車つりたれ  
そつとつらとつとつらとつらとつらとつらとつら  
しつとつらとつらとつらとつらとつらとつらとつら  
いみとつらとつらとつらとつらとつらとつらとつら  
つらとつらとつらとつらとつらとつらとつらとつら



とて備ておてありさるるしやりのあんと思ひ  
ぬをばうろーのりらうこ河内お母のこーや  
今を若山陽道義他國の中さしつゝやや尸神おし  
まきつゝやきくらるるし中ーまむを後内まてまん  
たしすろろれ罪辛ーしれ赤も町のりす生覺を  
まろ人のむまものこちろく嬢らうくまらろく  
か可らむーりまきこらうにまかろとろえろ  
Aのやろくまららるるる今ーやいろまきろ  
の赤たとなをゆるすろれまろ人の女生覺ろ  
こーろくられまらむとまなまろーびし  
限ろーんれむや子こらこーとやあ兒の母のあ

ありえんかろーま發しふをろろろふやあろん  
ししてよう後ろまろくたまれかまの増てまろろ  
かろひ思入まきまらとてろろへめねらるけ  
まらろ月日とことほとわやろく會れまどを  
親子とあひみえしとろろくまろひとろ  
よつもてまろそまろの書きまろねまろま  
ろろろとふろのろのんれ特とろろまのこま  
とて猪のあろとろまろろ肢まらあろろ  
まろやむまろろまろなりまろまろおろろ  
たろまろまろろせて殺まろくまろまろま  
ろ若のろろろろろらろろまろろろたまろび







思ひたむしとみりてうらやましくは山はけりひ  
 かゝりもいふにぬれつみりさるる小町あはれと  
 かたうつさちてう建はの美くは猿丸ととくくく  
 くれはやくと食ひあはせてかきとせりぬ  
 小猿丸といひとちのあまのよやくうりつ  
 るうとせを猿とみくはむとむりてくひあ  
 せり眼のさきくむくくちうらやまをみるま  
 力をと死つ家も滅ぶるひさしやうれあのをさ  
 こそくさよすもむうちうれをく世はらつちる契を  
 しつしあやのしもてちつううりあり給なんと  
 すうとされといふしつちううれをうれをさうりだ

うすうめいふちあはれとすうとむいぬがさうしや  
 ばそくちうれなうらうむとむもかちうら  
 りうかうんれくむりてあまのうれよむい  
 のけいあられてうらうりうれなうくうら  
 うくむらねよとのあひ目おかりてまげりさ  
 づいめうううらうんこちうらうらうては  
 ちりまてういりよ長持とてれむのむさあ  
 ちり入てりうらう猿丸うはあれよりむてうれ  
 生憎やくちれもむらうしにれあひ人うあ  
 こひの事んうらうの中うんあふむさう入とさ  
 ば栲もみそつようううてなふれうさういれい



たつたさきと申すすふらう猿の尻を七八尺つらうと  
なつうがとちりともをわらひくして申すこつこと  
まじつむしりよつうなくちるまらひりむひあつこと  
しつさぬよてよと産みりらりぬたりのきくの猿  
ときたぬよ二百つらりちぬてさぬいよつうがとあ  
ついるまゆとちきくぬくはひれさげひぬく  
ちつりとななるまおつこすりなつやうかゝもろ  
ちやうのつこる猿くして産たつとつぐまよや酢酒塩  
入つら瓶ともありりとみぬらちやうくをさたりさ  
てちしつらつらほほとよは横産す井たつをい  
猿よりまきやとち横のゆひをくちさしてあつことあもん

とすんこちひひくの猿とさづれよらしとすり  
初よひ男のぬここくくへそのれといふと二のい  
ぬたごつりくく中はたかな猿とくひてうらあを  
くひさひむして食うらさんとすうほとよは男猿を  
みこして糞らりおとつ虫と氷のやうなうくこあ  
をぬえてうれうら猿まお板のうくよひこあをて  
くひよのひひかぬあてくつふやうををれまら人の  
命とちりそのちくむくを食うこもる物をくくう  
あつそのぬくうけぬまれうつふやくひまら  
てさぬよひひてとちもあつうがをあつくうらて  
目とちうてくまて齒とつらうらくひんて目





う丸国に守るもさうらんその人さる程なくさ  
ころもさうくいなと国ごとくひひるかりりゆ  
を人さうして除目の物もこれ大志丹と一つものよ  
の事人さうくつひにその大志のそくくつら  
りくゆいありひてらひくの事死をさば大志  
の家よひさうつひてらんかゆかしとくみ人を  
ささりてさうくひさるくさうささうつが  
むとさるかゆひひたるあつた大志うあしの罪まの  
さうくつあまうあつれるいづみやましくんぬ  
けつうくさるかしとくみ丹あつて不意よこ  
人さうくつとありくおされならんとらん世よへ

うーまけさされえ大志もさうたの大志もい  
つちとくともさうくつらされもしがやけとと  
よさ死れ大志もさうらりともさひひらりとらん  
さうくひひるよをささうてとくさなんゆられけり  
あれも田村水のたつたの由阿はらんまきりつや  
今さ若國鞆院の流対るいこをさおされぬもなん  
おさうくつららぬよの臺盤小人とさうつがて  
おさひらうよさ人ゆくさうらんよ額とあつて  
ねありりさうてひひま流すらありとさうくつや  
さうくつはこれとさうくつとさうくつ一臺盤  
額とあつてのとさうくつとさうくつとさうくつ





子して俄と云うべきやてなしくもとせつて悦と云ふ  
 爰にみこしりけり  
 の中を著す計及び小槻南宗との入りのり多まうれ  
 子より羊博士なるものあり名の發助となしひひ  
 けり主計及び忠信の父淡路守大史史を親の祖父や  
 ひきたるをせんことなぐものゆるむものなれし  
 についてなぐもあるなし是のむちりあるしす入の  
 つらちつらの物と助大捕史をも吳人やとらう  
 さまもつとぶしりなりさひひもさうあつて  
 ありうりなりあひつとくもくもつらさう  
 御もつらなりあひつとくもくもつらさう

くるりりしてゆもひなしてとらうつらとと思ふ人ひ  
 あつよあの人れあつてもとらしひなつらうれ  
 陰陽師は物ととらうつらととくはつら  
 つま目ととをたいてくともつらたりなれつら  
 か門をたうくして物屋して居つらつら敵の人  
 つらつて陰陽師つらたぬ入る日ととととつら  
 つらつとのつらつらつらつらつらつらつらつら  
 るつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
 のつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
 つらつらつらつらつらつらつらつらつら  
 つらつらつらつらつらつらつらつらつら  
 つらつらつらつらつらつらつらつらつら  
 つらつらつらつらつらつらつらつらつら



Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged, slightly yellowed paper. The script is dense and fills most of the page, with some lines appearing to be part of a list or a series of entries. The characters are somewhat stylized and difficult to decipher without a key, but they appear to be a form of early modern European cursive.

ΠΟΧ  
401  
8